

一般財団法人 滋賀県民間社会福祉事業職員共済会  
地域共生型社会推進事業助成金

## 事業完了報告書（公開用）

### 1、概要

報告日	西暦 2023 年 4 月 30 日
報告者	上田 隼也
助成団体名 (所属団体名)	一般社団法人インパクトラボ
団体住所	〒 525-0059 滋賀県 都道府県 草津市野路 2 丁目 18 番 16 号
団体電話番号	077 — 599 — 4462
代表者 (助成対象者)	代表理事 上田 隼也
助成対象事業	コミュニティ・オーガナイザーの育成
事業（助成）期間	2022 年 4 月 1 日 ~ 2023 年 3 月 31 日
事業費総額	952,688 円
助成金総額	950,000 円

※住所・電話番号等は団体のものを記載し、個人情報に関わることは記載しないでください。

次ページ以降に「事業内容」、「事業成果」、「今後の課題など」を簡潔に記載してください。

#### 注意事項

- ①共済会ホームページに掲載しますので**個人情報の掲載は禁止**します。
- ②「事業内容」、「事業成果」、「今後の課題など」は**合計5ページ以内**で作成してください。
- ③**写真の掲載は原則禁止**しますが、どうしても必要な場合は最小限度に留めてください。
- ④写真を掲載される場合は**必ず撮影対象の方に事前に了承を頂く**ようお願いします。
- ⑤必ず Word ファイルのまま [shigakyo@cello.ocn.ne.jp](mailto:shigakyo@cello.ocn.ne.jp) へメールにてお送りください。

## 2、事業内容

### 【事業背景】

SDGs(Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)が掲げる「誰一人取り残さない社会」の実現に貢献することをミッションの1つとしてインパクトラボを設立した。そのパートナーとして滋賀県をはじめとする自治体と密に連携をしている。本事業の活動・研究フィールドの拠点としている守山市とは、これまで社会問題に対して、ビジネスを手段に解決する社会起業家育成分野にて連携をしてきた。守山市との連携を通じ、一部の限られた意識の高い層による社会問題の解決だけでなく、多くの市民が社会課題の解決に参画できる仕組みが必要だと分かった。その際に、身の回りの社会問題について関心を持ち、議論し、対話することで「困りごとをジブンゴト」とすることが重要である事を発見した。そこで、「一人ひとりはずごい!」というコンセプトのもと市民が自分でもできるという自己肯定感を持つことこそ最重要だと考え「コミュニティ・オーガナイザーの育成」をテーマに本事業を取り組むに至った。

### 【実施内容】

本事業では、地域が抱える社会問題を発見・解決する取り組みの伴走をしながら、コミュニティの輪を広げる「コミュニティ・オーガナイザー」を育成する。コミュニティ・オーガナイザーの役割は、コミュニティ・オーガナイズングを手段として、コミュニティを形づくり、コミュニティの持てるもの(資源)からパワー(動き)を作っていくことである。本事業では、社会活動に興味のある高校生や子育て世代を対象に、下記の4つの取り組みを実施した。

\*コミュニティ・オーガナイズングとは

コミュニティ・オーガナイズングとは、「仲間を集め、その輪を広げ、多くの人々が共に行動することで社会変化を起こすこと。

参考文献：コミュニティ・オーガナイズング。ほしい未来をみんなで創る5つのステップ

鎌田 華乃子 英治出版

#### ① 守山市・起業家育成事業における高校生を中心としたコミュニティ形成

守山市で2020年度から3年間実施されている起業家育成事業である「びわ湖キャリアチャレンジ・びわ湖ピッチ」の過去の参加者に向けたワークショップを実施した。ともに事業に挑戦した仲間と意見交換したことで、社会問題をジブンゴトに落とし込むことができ、社会問題に取り組むためのコミュニティづくりや仲間づくりの必要性を感じてもらうことができた。プログラムに参加した高校生と歴代の参加者が繋がり、守山市の高校生コミュニティを活性化させることを目的とした。

#### ② 立命館守山中学校・高等学校における「メタバース保健室」の実践

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、他人と話すことに不安を感じる生徒が増えてきている。そのような中、実際に心理的な不安から学校の保健室に通う生徒が増えたという意見を、立命館守山中学校・高等学校の養護教諭からいただいた。そこで本事業において、自分の行動や活動に自信を持つことができない生徒を中心に、2022年10月よりワークショップを行い、学校内で社会実験を実施してきた。

#### ③ 近江八幡市での特色ある公園づくりワークショップの共同実施

当初は守山市における子育て世代を中心にコミュニティ・オーガナイザーの育成として、ワークショップを実施予定であった。しかし、本事業を実施するにあたり、近江八幡市の担当者より「子育て世代を中心とした市内の児童公園の利活用を考えるワークショップのファシリテーターとして学生に参加してほしい」と要望があった。そこでコミュニティ・オーガナイズングのトレーニングを受けた大学生3名が参加した。その結果、これまで習得した手法を活用し、子育て世代や公園関係者などの参加者とともにアイデアを出し合い、意見をまとめることができた。

#### ④ コミュニティ・オーガナイザーのロールモデルとなる人のインタビュー

守山市を中心に市民活動で活躍する方や研究者を中心に、抽象的なコミュニティ・オーガナイザーの具体的なイメージを提供するため、活動についての取材や意見をもらった。インパクトラボのnoteで積極的に発信を行った。

### 3、事業成果

滋賀県の他の市町村に比べて、守山市は、ベッタウンとして、近年子育て世代が増えていること、県内でもトップクラスの学校外の学びに積極的な教育機関があることが強みである。そこに、インパクトラボの経験豊富なスタッフや立命館大学の学生が積極的に関わることで目標に一步でも近づきやすい環境・土壌が整ってきたと言える。そこで、本事業は守山市から滋賀県内の地域共生型社会を実現するために、多様な手段で社会問題に関心を持ち、行動する人が増殖していくコミュニティができること、コミュニティ・オーガナイザーを育成する教育プログラムを構築することを目標として、各種事業を実施した。その結果、本事業では、先ほど記述した切実なコミュニティへのニーズを求める子育て層や高校生をターゲットに、10名のコミュニティ・オーガナイザーを育成することができた。

#### ① 守山市起業家育成事業におけるワークショップの実施

【日 時】2022年8月28日(日)

【参加者】25名

OB・OG：9名(大学2年生：1名、大学1年生：6名、高校3年生2名)

2022年度参加者：16名

【成 果】

- コミュニティづくりに関する意識調査を行い、以下の結果となった。
  - 参加者の約半数が社会問題に取り組むにあたって、コミュニティづくりの経験がある、またはコミュニティに所属することを検討している。
  - 参加者が感じているコミュニティづくりの中での課題は、資金調達などの持続可能なマネジメントであり、「ビジネスや起業の方法を学ぶ機会」や「補助金や助成金の情報提供」が求められている。
  - 社会問題に取り組むために、仲間集めやチームを構築する方法など、コミュニティ・オーガナイズングに関する知見を得られる機会も必要である。

#### ② 立命館守山中学校・高等学校における「メタバース保健室」の実践

【日 時】2022年10月から2023年3月まで月2回

【参加者】高校生7名、養護教諭1名

【成 果】

- 活動を通して得られた成果は、以下の通りである。
  - デジタル機器を活用した、アバターによるコミュニケーションは、コミュニティを活性化する1つの手段となりうる。
  - 外部機関が実施するプロジェクトではなく、学校の保健室を利用した活動であるため、参加した生徒も安心して参加することができる。
  - 参加した高校生と教員の立場の差が一般的なコミュニケーションよりも低く感じたという意見が挙げられた。

#### ③ 近江八幡市での特色ある公園づくりワークショップの共同実施

【日 時】2023年3月4日(土)、18日(土)

【参加者】25名程度(子育て世代、学生、公園周辺住民の方など)

【成果・新たな発見】

ワークショップに参加した子育て世代からは「子育て世代は強い思いを持っている方が多いので意見や価値観がぶつかることが課題である。学生が傾聴し、当事者とは違う視点があったことで、みんなが納得する意見にまとめることができたように感じる。」という声が挙げられた。子育て世代のコミュニティ・オーガナイズングの課題である「みんなが納得する合意形成」の一端を学生が担うことで、社会課題に取り組む人やコミュニティの繋がりがより広がると考えられる。

#### ④コミュニティ・オーガナイザーのロールモデルとなる人のインタビュー

番号	テーマ	取材先
1	地域を舞台にした仲間づくりを目指して	守山市健康福祉政策課 犬丸 智則 様
2	必要なコトに必要なモノを	Café Ink MORIYAMA 佐子 友彦 様
3	つながりから滋賀を世界一のまちへ	今プラス管理人 中野 龍馬 様
4	ファシリテーション養成講座 参加レポート	成安造形大学 助教 田口 真太郎 様
5	興味を持つことが伝えるきっかけに	NHK 大津放送局キャスター 三角 朋子 様
6	ちょっとおもしろい子育てができるまち	Mom funs 代表 秋村 加代子 様
7	困難な状況を意図的に体験する	立命館大学 教授 山中 司 様

#### ⑤大学の教養科目への還元

本事業で得られた成果の一部を 2023 年度春学期に実施される立命館大学における教養科目である SDGs 表現論-プロジェクト・プラグマティズム・ジブンゴト-(立命館大学生命科学部教授 山中 司先生)の授業のシラバスに明記し、コミュニティ・オーガナイザーの育成をとして、大学教育への還元を行うことができた。今後、大学での実践事例を積み上げ、育った若い世代がその地域にあったコミュニティ・オーガナイザーとして活躍できる仕組みを作っていきたい。

#### ⑥研究会での活動報告

2023 年 3 月 24 日(金)、立命館大学サービスラーニングセンター主催の 2022 年度第 6 回 VSL 研究会 (特別公開シンポジウム)にて、本事業の活動報告を行った。本事業では、コミュニティ・オーガナイザーを育成する手法として、ファシリテーションのスキルを習得することに着目し、それを担う学生に対して、ワークショップの進行役として関わっていくことが効果的であると捉えていた。研究会では、コミュニティ・オーガナイズと学生ファシリテーター、そして (ボランティア) コーディネーターとの関わりについて議論が展開された。「オーガナイザーは最初からいる。ファシリテーターはそこにいる。コーディネーターはふとしたときにそこにいた、という印象がある。オーガナイザーは能力、ファシリテーターは態度、コーディネーターは知識が重要な気がする。」という意見があった。そこから、コミュニティ・オーガナイザーとして成長するためには、傾聴や対話などのファシリテーションスキルに加えて、アクションに向けた具体的な戦略を考える能力を身につけられるかが今後の課題であることが明らかになった。

#### 【成果発信】

##### ■インパクトラボ WEB

URL : <https://impactlab.jp/archives/3977>

##### ■note 「コミュニティ・オーガナイザーの育成」実施レポート

URL : <https://note.com/impactlab/m/m74f5666b56eb>

##### ■YouTube 「【地域共生社会推進事業】コミュニティ・オーガナイザーの育成」

URL: <https://youtu.be/6vu8bZwKG-k>

\*本事業が、2023 年 3 月 9 日(木)NHK 大津放送局「しがばな」の特集に取り上げられました。

#### 4、今後の課題など

2022年度に実施したコミュニティ・オーガナイザーの育成について一定の成果を得ることができた。さらに、本事業に関わった若い世代は、約 40 名に増えることができた。「一人ひとりはずごい」という滋賀県守山市が掲げる目標に事業に関わった高校生や大学生、さらには子育て世代の感想から少しでも貢献することができたと言える。一方で、今後の課題として、下記の 3 点が挙げられる。

##### ① メタバース保健室の運用面での課題

本事業では、学校に行くことが難しい生徒を想定して、VRに代表されるメタバースを利用した次世代の保健室をテーマにインパクトラボスタッフと養護教諭がともに事業を推進してきた。しかし、2023年3月現在、メタバースを利用するにあたり学校の Wi-Fi の問題があるなど実証実験から実際の運用には課題が残る結果となった。さらに、この間に Open AI 社による対話型チャット AI である ChatGPT が注目されるようになった。次世代の保健室を実現するにあたり、メタバースだけでなく AI を活用して自分の悩みを少しでも自己理解することができる「AI フレンドリーな若い世代」を育てることに次年度以降に取り組んでいきたい。

##### ② 日本らしい、滋賀県らしいコミュニティ・オーガナイザーの育成モデル

第 6 回 VSL 研究会(特別公開シンポジウム)でファシリテーションやコミュニティ・オーガナイザーの役割が議論になったように、横文字が多くなってしまっていることで、取り組みの内容が理解しにくくなってしまっているように感じた。コミュニティ・オーガナイズはアメリカで始まった手法であるが、地域の多様な世代に本事業の取り組みを理解してもらうため、日本らしい、滋賀県らしいコミュニティ・オーガナイザー育成の事例を作っていく必要であると考えている。

##### ③ 継続的なコミュニティ・オーガナイザーの育成

本事業の成果や課題を関係者で共有し、助成が終了後にも大学での授業での継続や立命館大学との共同研究を通して、継続的にコミュニティ・オーガナイザーの育成を行っていきたい。さらに、本事業の成果を論文として学術面でも成果を丁寧に残すことが必要である。